

記事一覧

学会スペシャル: 第 18 回日本乳癌学会
2010 年 6 月 24 日～25 日 札幌

乳癌で化学療法を受けた患者の約半数で脱毛 後の髪質が変化【乳癌学会 2010】

2010/6/28

森下紀代美＝医学ライター

乳癌で化学療法を受けた患者へのアンケート調査の結果、化学療法による一時的な脱毛の後、持続的な髪質の変化を認めた患者は半数以上に上り、化学療法終了から 2 年以上が経過してもかつらを外せない患者も存在することがわかった。6 月 24、25 日に札幌市で開催された第 18 回日本乳癌学会学術総会で、独立行政法人国立病院機構仙台医療センター乳腺外科の渡會有希子氏が発表した。

脱毛は患者の QOL を大きく低下させる化学療法の副作用であるが、期間は限定的で、化学療法の終了に伴って回復すると考えられてきた。しかし、これまで化学療法による脱毛や髪室の変化に関する具体的なデータは示されていなかった。

渡會氏は、髪質の変化を認めることが多いという患者の声から、化学療法施行後の再発毛について基本的な実態を把握することを目的として、アンケート調査を行った。

調査期間は 2009 年 10 月から 2010 年 5 月までとし、同院乳腺外科外来を受診し、過去に化学療法を受けた乳癌患者 85 人(女性 83 人、男性 2 人)を対象とした。化学療法終了時の平均年齢は 51 歳、化学療法施行後の期間の中央値は 32 カ月であった。

施行した化学療法は FEC100(5-FU、エピルビシン、シクロホスファミド) +ドセタキセル、または FEC100+パクリタキセルであった。FEC100 では、5-FU 500mg/m²、エピルビシン 100mg/m²、シクロホスファミド 500mg/m²を 3 週毎に 4 サイクル投与していた。ドセタキセルは 75mg/m²を 3 週毎に 4 サイクル、パクリタキセルは 80mg/m²を週に一度、12 サイクル投与していた。

アンケート調査の項目は、髪質の変化(くせ毛になったか、くせ毛が改善したか)、髪の量や太さの変化、頭髪以外の髪質の変化、再発毛までの期間、かつら離脱までの期間の 5 項目とした。

調査の結果、髪質の変化として「くせ毛になった」と答えたのは 56 人(66%)で、そのうち「今もくせ毛である」は 29 人(51%)だった。髪の量が「減った」と答えたのは 50 人(53%)、髪の太さが「細くなった」は 63 人(74%)であった。髪の量が増えた、または髪の太さが太くなったと答えたのは数%にすぎなかった。

頭髪以外では、眉毛がすべて消失したのは 56 人(66%)、一部消失したのは 23 人(27%)だった。睫毛がすべて消失したのは 58 人(68%)、一部消失したのは 17 人(20%)だった。アートメイクをしたと答えた患者は 38 人(44.7%)に上った。

58 人(68%)に再発毛を認め、再発毛までの期間の中央値は 3 カ月、化学療法終了後からかつら離脱までの期間の中央値は 8 カ月だった。12 カ月以内に 54 人(67%)がかつらから離脱したが、5 人(6%)は観察期間中には離脱できなかった。そのうち 2 人(2.4%)は 2 年以上経過してもかつらを外すことができていなかった。かつらを外せなかった 5 人について検討したが、年齢、化学療法終了からの期間、化学療法、ホルモン療法との併用に相関性はみられなかった。

渡會氏は「かつらを外せなくなる明らかな予測因子は認められなかった。今後も症例数を集めて検討する必要がある。患者には化学療法による脱毛に関して具体的な情報を提供すべき」と話した。